

富山市埋蔵文化財調査報告 41

よね だ だい かく  
**富山市米田大覚遺跡**  
**発掘調査報告書**

—株式会社不二越 物流管理センター建設に先立つ発掘調査報告—

2010

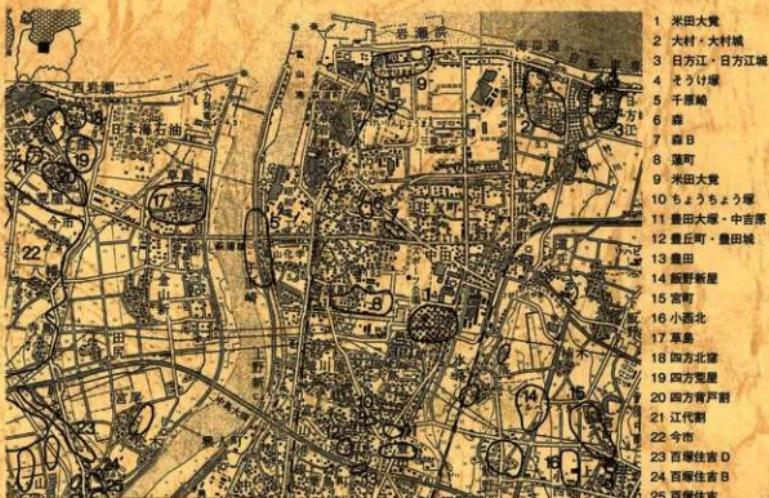
富山市教育委員会  
戸田建設株式会社

# 例　　言

- 本書は、富山市米田町3丁目地内に所在する米田大覚遺跡の発掘調査報告書である。
- 調査は株式会社不二越による物流管理センター新築工事に先立つもので、同社から依頼を受けて富山市教育委員会埋蔵文化財センターが行った。調査に際して、工事施工者である戸田建設株式会社北陸支店の協力を得た。
- 試掘確認調査期間・対象面積（役職は当時）  
平成20年12月4日、11日（2日間） 7,232.80 m<sup>2</sup>  
担当 主査学芸員 鹿島昌也、嘱託 小林高太、同 秋葉保香
- 発掘調査は、物流管理センター外構工事に先立つ本発掘調査であり、調査は富山市教育委員会埋蔵文化財センターの指揮・監理の下で、日本海航測株式会社が担当した。
- 発掘調査期間 現地調査 平成21年3月23日～平成21年4月1日  
出土品整理 平成21年4月2日～平成21年5月29日  
担当 久保浩一郎 監理担当 主幹学芸員 古川知明（役職は調査当時）
- 本書の執筆は、第1章、第2章を埋蔵文化財センター鹿島が、それ以外を日本海航測株式会社久保が分担し行った。文責は文末に記した。
- 調査及び出土品整理にあたり、次の方々よりご協力・ご助言を賜った。記して謝意を表します。  
池野正男、出越茂和、宮田進一、株式会社不二越（敬称略、五十音順）

# 目　　次

第Ⅰ章 経緯	1	第Ⅳ章 総括	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2	参考文献	
第Ⅲ章 発掘調査の概要	3	写真図版	8
第1節 基本層序 第2節 遺構 第3節 遺物		報告書抄録、凡例	



第1図 米田大覚遺跡と周辺の遺跡 (1:50,000)

## 第Ⅰ章 経 過

米田大覚遺跡は、富山市教育委員会が昭和63年～平成3年度に実施した市内分布調査により発見された。平成5年3月発行『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡No.201021）となった。遺跡の推定面積は212,000m<sup>2</sup>であり、古代及び中世を主体とする集落及び官衙跡である。

平成20年11月10日、米田町3丁目地内の米田大覚遺跡の埋蔵文化財包蔵地において、重機による掘削が施工されている状況を確認した。市建築指導課へ問い合わせたところ、当該地において工場新築のための申請が出され、市建築指導課から委託を受けた日本E R I株式会社金沢支店が建築確認申請の審査を行ったことが判明した。都市計画法に基づく申請者は株式会社不二越、代理者が戸田建設株式会社で、この時点では、文化財保護法第93条に基づく届出が提出されておらず、同年10月16日の起工式を経て物流管理センターの基礎工事が着手されていた。

同年11月18日、株式会社不二越及び戸田建設株式会社から、工事着手までの経緯について説明を受け、文化財保護法第93条に基づく届出の提出と試掘確認調査の実施について協力を求めた。翌日、日本E R I株式会社金沢支店から経緯について説明を受けた。

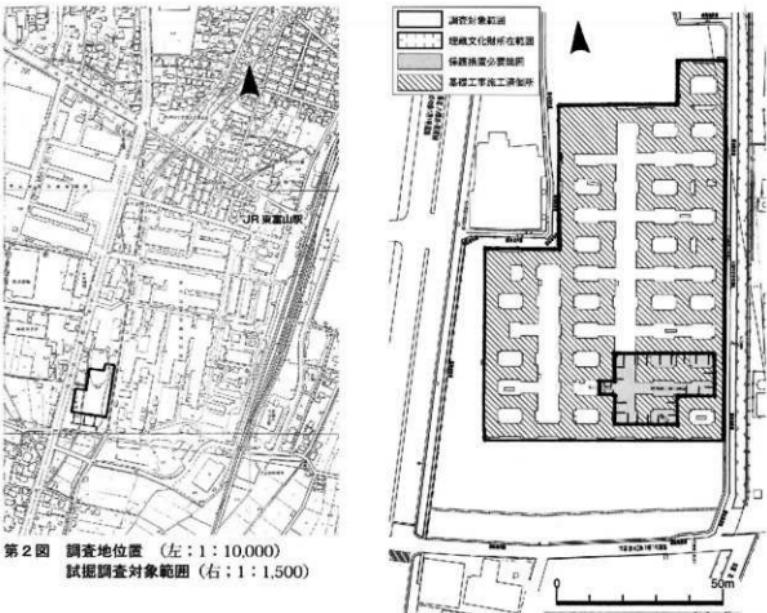
同年11月27日付けで、株式会社不二越総務部長及び戸田建設株式会社北陸支店設計室長名で、本事案にかかる頃末書が提出された。これを受け、同年12月9日付けで株式会社不二越取締役社長及び戸田建設株式会社北陸支店店長あてに、埋蔵文化財保護について徹底し、遵守するよう求めた「米田大覚遺跡における埋蔵文化財の取り扱いについて」を市教育長名で通知し、指導を行った。同年12月5日付けで、米田町3丁目地内の11,812.13m<sup>2</sup>を工事対象とした文化財保護法第93条に基づく届出が、株式会社不二越から提出された。

同年12月4日及び11日の2日間、物流管理センター新築工事予定地の内、建築面積7,232.8m<sup>2</sup>を対象に試掘確認調査を実施した。その結果、対象地の南寄り570mに遺跡の所在を確認した。その内、基礎工事施工箇所を除く380m<sup>2</sup>について保護措置を講じるように、同年12月15日付けで通知した。

同年12月17日、市埋蔵文化財センターにおいて、株式会社不二越及び戸田建設株式会社と遺跡の保護措置について協議を行った。当初、現地表下1mの地盤改良工事が計画されていたが、現地表下0.7～0.8mから下に遺跡が確認されたため、工法変更により、地盤改良を現地表下0.6m（造成盛土内）に留めることで遺跡の保護措置を講じた。以上の経過を踏まえて、試掘確認調査の報告書を作成することで合意した。

一方、平成21年2月17日、物流管理センター建物南側の駐車場内の外構工事にかかるV S側溝設置のための掘削工事計画について、戸田建設株式会社から照会があった。現況アスファルト舗装の駐車場部分で、掘削幅が狭いため、工事立会調査にて対応すると回答した。同年3月16日から掘削に着手する予定で、掘削深は0.6mとの連絡を受けた。造成盛土内での掘削に留まるため、慎重に工事に着手するよう指示をした。16日午後に掘削の状況を確認したところ、事前協議の予定深度を0.3m以上越え、遺物の出土及び掘削が深い箇所では遺構が確認された。このため、工事の一時中止と今後の対応を協議した。今回の側溝掘削で、約10m<sup>2</sup>の遺跡の損壊が発生したことを確認し、今後の掘削予定箇所を含めて、緊急的に計57m<sup>2</sup>について発掘調査による記録保存作業の必要性が生じた。同年3月23日付けで戸田建設株式会社北陸支店から始末書が提出され、同日付けで同社に対して、市教育長名で埋蔵文化財の保護に関して厳重に遵守を求める旨の指導を行った。

発掘調査は、戸田建設株式会社が日本海航測株式会社に委託して実施した。同年3月23日付けで両者及び市教委の三者で「米田大覚遺跡発掘調査に関する協定書」を取り交わした。同年4月3日までに現地発掘作業を行い、同年5月29日まで出土品整理調査を実施した。以後報告書原稿編集・印刷を戸田建設株式会社の協力を得て実施し、平成22年12月28日に発掘調査報告書を刊行した。



## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

遺跡は、富山市の北部に位置し、西約 1.5km に神通川、東約 4km に常願寺川が流れる。海岸線からは約 3km、JR 北陸本線東富山駅から南西約 800 m に立地する。遺跡の標高は約 8 m を測り、扇状地上微高地に立地している。現在の町名は、富山市米田町 1 丁目～3 丁目である。

本遺跡周辺には縄文時代から江戸時代にかけての遺跡が広範囲に所在する。神通川右岸海岸部には縄文時代晩期前半の岩瀬天神遺跡がある。晩期後半には、本遺跡南方に豊田遺跡が出現し、石庭丁形の石器や打製石斧の存在から農耕の可能性が指摘されている。弥生時代には、宮町遺跡で玉作りを行った集落跡が所在する。古墳時代には前期にちょうちよう塚古墳が築かれ、赤彩土器や底部穿孔壺など祭祀色の強い土器が出土した。豊田大塚・中吉原遺跡では弥生後期～古墳前期に溝地の肩部に祭祀土器の大量廃棄が確認され、平安時代には人面墨書き土器や人形など祭祀遺物が多数出土し、新川郡衙の祭祀場とみられている。

本遺跡では、平成 7-8 年度の発掘調査（調査面積 4,600 m<sup>2</sup>）で、掘立柱建物が 32 棟検出され、整然とした配列を示した。208 点もの墨書き土器や石帶など、官能的な遺物も多く出土し、平安時代前期の越中国新川郡衙（郡家）に関連する遺構群と推定されている。

平成 20 年度の発掘調査（1,869 m<sup>2</sup>）では、平安時代の井戸や中世の溝・土坑が多数検出された。中世に所在した「米田保」に関係すると推定され、当地区の歴史を解明する上で重要な成果が得られた。

中世には「郷船式目」に掲げられる三津七湊の一つとして「越中岩瀬湊」がある。その位置は不明であるが、神通川河口左岸に四方荒屋遺跡や四方北窓遺跡など中世期の集落が所在し、関連が注目される。中世後期には東岩瀬城や大村城、日方江城などの平城が築かれた。中世末から近世前期には神通川河口右岸に千原崎遺跡が形成された。千原崎には江戸時代前期に加賀藩の渡し場「千原崎の渡」が設けられ、遺跡は渡し場周辺に設けられた宿場的な町屋遺構群と考えられている。

## 第Ⅲ章 発掘調査の概要

### 第1節 基本層序(第3図)

調査区は駐車場造成により地表面から40~60cm下まで盛土され、その下位にI~X層が確認できた(第2図)。地山はVII層(にぶい黄褐色砂質土)、IX層(明黄褐色粘質土)、X層(灰白色シルト)であり、遺構確認面はIX層上面である。I・II層は盛土で、I層は造成前の耕作土である。III~VII層は自然堆積土で、III層は古代~近世の遺物包含層である。調査区東側では、西側に比べ地山の起伏が多く、堆積状況もやや複雑で、IV~VI層が確認できた。VII層は調査区中央部でのみ確認でき、旧水田の跡とみられる。

調査区全体が削平されているが、調査区東側では部分的に自然堆積土が残存している状況である。調査区中央から西側では盛土の下がIX層の地山となる。このIX層上部が遺構確認面である。

### 第2節 遺構

調査区内よりピット

4基、土坑2基、溝3

基、井戸1基を検出した。以下、調査区東側より各遺構の詳細を述べる。

SE01 北側半分は調査区外であるが、長軸

2.10m、短軸1.00m、

深さ1.00mを測る不整円形の井戸であり、上部は削平されている。井戸側は遺存していないが、第3層より曲物の側板(10)が出土しており、この曲物が井戸側として使用されていたものと考えられる。井戸側部分は内径1.1mを測る。越中瀬戸焼の皿(9)が出土した。

SK02 南側半分は調査区外であるが、長軸1.50m、短軸0.85m、深さ0.65mを測る隅丸方形の上坑である。越中瀬戸焼の皿(11)と一端に加工痕のある木製品(12)が出土した。

SD03 南北方向に走る、幅3.30m、深さ0.65mを測る溝である。越中瀬戸焼の匣鉢(13)が出土した。

SD04 南北方向に走る、幅0.90m、深さ0.10mを測る溝である。P05と重複し、P05より古い。

P05 径0.25m、深さ0.35mを測る円形のピットである。SD04と重複し、P05より新しい。

P06 径0.40m、深さ0.20mを測る円形のピットである。

SD07 南北方向に走る、幅0.60m、深さ0.10mを測る溝である。

P10 長軸1.4m、短軸0.40m、深さ0.20mを測るピットである。南側が調査区外へ続くため、形状は不明である。近世の磁器片が出土した。

P12 径0.20m、深さ0.05mを測る円形のピットである。

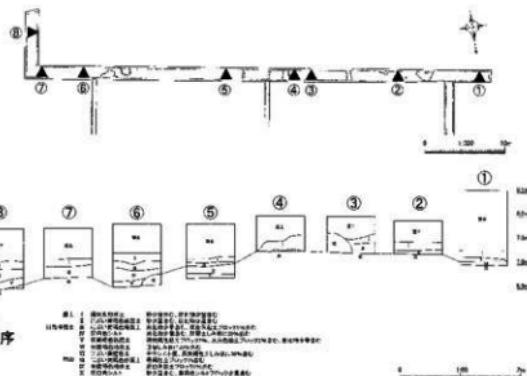
SK13 長軸2.30m、短軸1.20m、深さ0.30mを測る不定形の上坑である。風倒木の可能性が高い。

### 第3節 遺物(第5図)

ここでは兜<sup>s</sup>二越物流管理センター建設工事に先立って行われた試掘確認調査で出土した遺物を併せて報告する。試掘確認調査及び発掘調査により、古代~近世の遺物が出土した。

#### (1) 試掘確認調査出土遺物

1・2は須恵器である。1は皿ないし塊の底部片である。底径5cmで、底部脇から直線的に開きながら立ち上がる。底部外縁には回転糸切り痕が残る。2は甕の体部片である。



第3図  
基本層序

調査区外であるが、長軸

2.10m、短軸1.00m、

深さ1.00mを測る不整円形の井戸であり、上部は削平されている。井戸側は遺存していないが、第3層より曲物の側板(10)が出土しており、この曲物が井戸側として使用されていたものと考えられる。井戸側部分は内径1.1mを測る。越中瀬戸焼の皿(9)が出土した。

SK02 南側半分は調査区外であるが、長軸1.50m、短軸0.85m、深さ0.65mを測る隅丸方形の上坑である。越中瀬戸焼の皿(11)と一端に加工痕のある木製品(12)が出土した。

SD03 南北方向に走る、幅3.30m、深さ0.65mを測る溝である。越中瀬戸焼の匣鉢(13)が出土した。

SD04 南北方向に走る、幅0.90m、深さ0.10mを測る溝である。P05と重複し、P05より古い。

P05 径0.25m、深さ0.35mを測る円形のピットである。SD04と重複し、P05より新しい。

P06 径0.40m、深さ0.20mを測る円形のピットである。

SD07 南北方向に走る、幅0.60m、深さ0.10mを測る溝である。

P10 長軸1.4m、短軸0.40m、深さ0.20mを測るピットである。南側が調査区外へ続くため、形状は不明である。近世の磁器片が出土した。

P12 径0.20m、深さ0.05mを測る円形のピットである。

SK13 長軸2.30m、短軸1.20m、深さ0.30mを測る不定形の上坑である。風倒木の可能性が高い。

3・4は非ロクロ成形の土師器皿である。3はやや丸みのある底部から直線的に開きながら立ち上がり、端部は丸くおさめている。口縁部には2段のナデが施される。4は丸い底盤から緩やかに立ち上がり、端部に面をもつ。口縁部には2段のナデが施され、体部中央に段をもつ。調整方法や形態的特徴から、いずれも13世紀中頃のものと考えられる。

5は柱状高台皿である。平坦な見込みから緩やかに浅く立ち上がり、端部を丸くおさめている。内外面ともロクロナデが施される。3と同一の遺構から出土しており、同一時期のものと考えられる。

6は黒色土器塙の底部片である。内面のみ黒色に仕上げられている。底部は回転糸切りにより切り離されたあと、高台を引き出し、高台部をナデで仕上げられている。高台の内側には高台を引き出した際の痕跡がみられる。10世紀末～11世紀代のものと考えられる。

7は越中瀬戸焼の皿の口縁部片である。やや外舟しながら立ち上がり、端部に面をもつ。外面は強いナデにより段をもつ。内外面上部に灰釉が施されている。

8は端部に加工痕のある木片である。

## (2) 発掘調査出土遺物

9・10はSE01より出土した。9は越中瀬戸焼のひだ皿である。底部は削り出し高台で、高台脇から緩やかに開きながら立ち上がり、端部は丸くおさめる。灰釉と鉄釉がそれぞれ対向する位置に2回ずつ付け掛けされている。17世紀代と考えられる。10は曲物の側板片である。井戸側に使用されていたと考えられる。

11・12はSK02より出土した。11は越中瀬戸焼のひだ皿である。底部は削り込み高台で、緩やかに開きながら浅く立ち上がり、端部を丸くおさめる。鉄釉が施される。また、底部外周に墨書きが施されている。鉄釉の色調や高台の削り方等、9より新しい様相を呈し、18世紀以降のものと考えられる。12は端部に加工痕のある木製品である。

13はSD03より出土した越中瀬戸焼の匣鉢である。底部から垂直に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し、端部は面をもつ。体部は内外面とも強いロクロナデが施されており自然釉が掛かる。

14～16は遺構外(II層)より出土した遺物である。14は上師器の塙の底部片である。底部脇から直線的に開きながら立ち上がる。内外面ともナデが施される。15は瀬戸美濃焼の塙の口縁部片である。16は肥前磁器の体部片である。

## 第IV章 総 括

試掘調査・発掘調査により古代～近世にかけての遺物と、中世～近世の遺構が検出された。

古代では、試掘調査により須恵器・土師器・黒色土器が出土した。須恵器は小破片のみで、詳細な時期を特定することは困難である。黒色土器は底部片1点ではあるが、特徴的な製作技法が見られることから10世紀末～11世紀代のものと考えられる。本調査地点より西に約250mの地点で行われた発掘調査では、9世紀中頃を中心とした、8世紀末～10世紀初頭にかけての越中国新川群衝に關係すると考えられる遺構・遺物が発見されている(富山市教育委員会2006)。本調査区において出土した遺物は、上記遺跡に後続する遺跡が周辺に存在することを示唆するものである。

中世では、試掘調査により溝が検出され、土師器皿が出土した。非ロクロ成形の上師器皿は、口縁部に施された2段のナデと、それにより体部中央に段を有する形態から、京都系の系譜を引くものと考えられ、13世紀中頃に位置付けられる(森2003)。また、柱状高台皿は、高台形状は不明であるが、皿部の形状からは12世紀～13世紀代に位置付けられると考えられ、上記土師器皿と同一の遺構から出土していることから、13世紀中頃と考えられる。中世においても遺構・遺物は希薄であるが、13世紀を中心とする生活の痕跡が認められる。

近世では、発掘調査によりピット・土坑・溝・井戸が検出され、試掘・発掘調査により越中瀬戸焼・瀬戸美濃焼・肥前磁器・木製品が出土した。発掘調査地点は、水田整備時に削平されており、井戸や溝などの深い遺構のみ

が遺残している状況である。出土遺物から 17世紀～19世紀にかけての遺構と考えられる。調査区東側では自然堆積層が遺存しているが、遺構・遺物が確認されなかったことから、SE01付近が遺跡東端と考えられる。調査区中央部にみられる第Ⅴ層から、本来の生活面は標高7.5m付近であったとすると、50cm程度は削平されていることとなり、調査区西側に遺構が少ないのは削平された結果と考えられる。SD03のような大型の溝や戸戸は、周辺に集落が存在したことを示唆する。

土器・陶磁器観察表

番号	出土地點	種類	基盤	重量 (kg)	内底	外底	内壁	外壁	脚	質
1. 陶器底盤	1PF 台形	陶器底	無	-	0.0	0.0	白	白	無	無
2. 陶器底盤	1PT 土器	陶器底	無	-	0.0	0.0	白	白	無	無
3. 陶器底盤	1PT 土器	陶器底	無	0.2	0.0	0.0	白	白	無	無
4. 陶器底盤	1Y 土器	陶器底	無	0.0	0.0	0.0	白	白	無	無
5. 陶器底盤	1T 土器	陶器底	無	15.6	0.0	0.0	白	白	無	無
6. 陶器底盤	1T 土器	陶器底	無	4.4	0.0	0.0	白	白	無	無
7. 陶器底盤	1T 土器	陶器底	無	1.7	0.0	0.0	白	白	無	無
8. 陶器底盤	APH 土器	陶器底	無	12.8	0.3	0.0	白	白	無	無
9. 陶器底盤	SKS 土器	陶器底	無	10.2	4.2	2.2	白	白	無	無
10. 陶器底盤	SKS 土器	陶器底	無	14.9	11.2	0.0	白	白	無	無
11. 陶器底盤	SKS 土器	陶器底	無	14.0	0.0	0.0	白	白	無	無
12. 陶器底盤	SKS 土器	陶器底	無	14.0	11.2	0.0	白	白	無	無
13. 陶器底盤	SKS 土器	陶器底	無	14.0	11.2	0.0	白	白	無	無
14. 陶器底盤	SKS 土器	陶器底	無	14.0	11.2	0.0	白	白	無	無
15. 陶器底盤	白土器	陶器底	無	-	0.0	0.0	白	白	無	無
16. 陶器底盤	白土器	陶器底	無	-	0.0	0.0	白	白	無	無

( ) は推定値

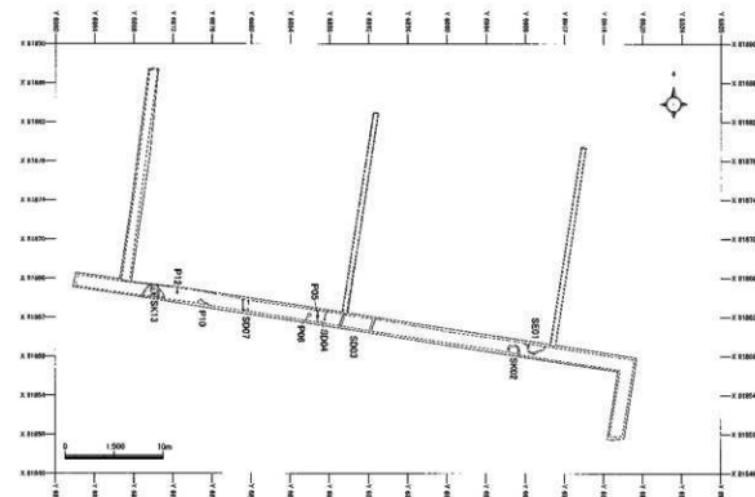
木製品観察表

番号	出土地點	種類	重量 (kg)	内底	外底	質
3. 木製底盤	1PT 土器	木製底盤	0.0	0.0	0.0	無
10. 木製底盤	APH 土器	木製底盤	0.0	0.0	0.0	無
12. 木製底盤	SKS 土器	木製底盤	0.0	0.0	0.0	無

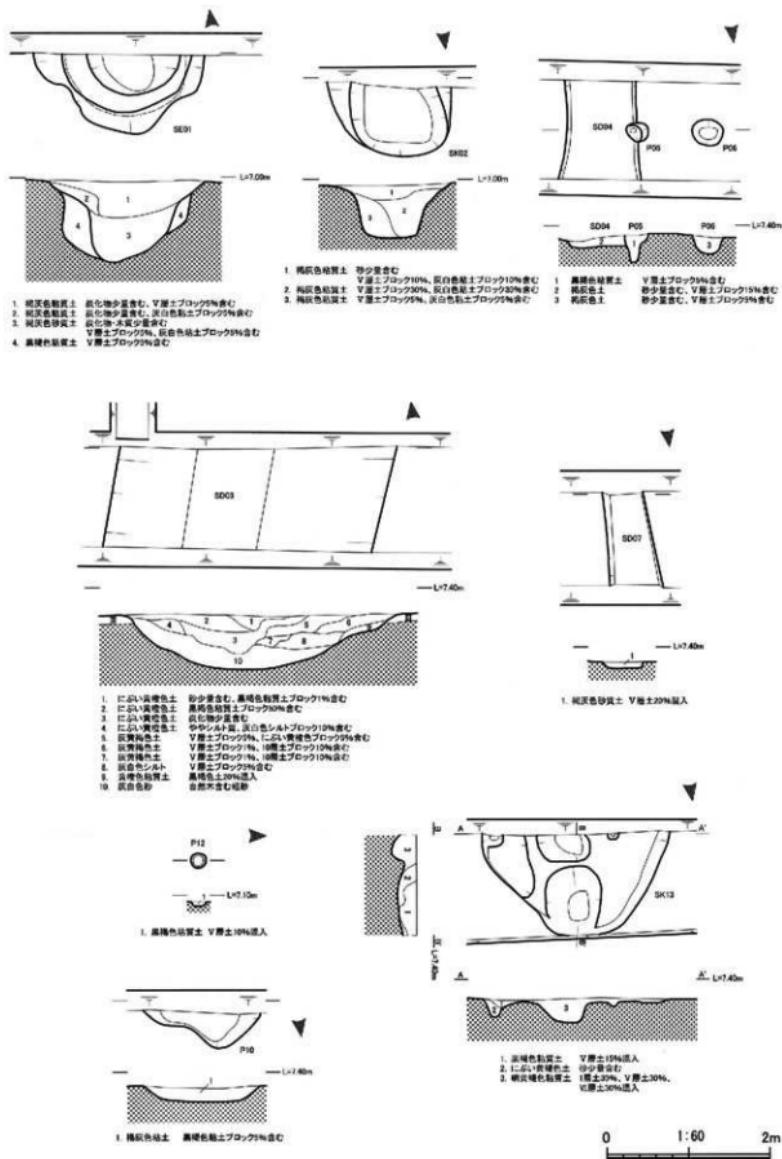
( ) は推定値

## 参考文献

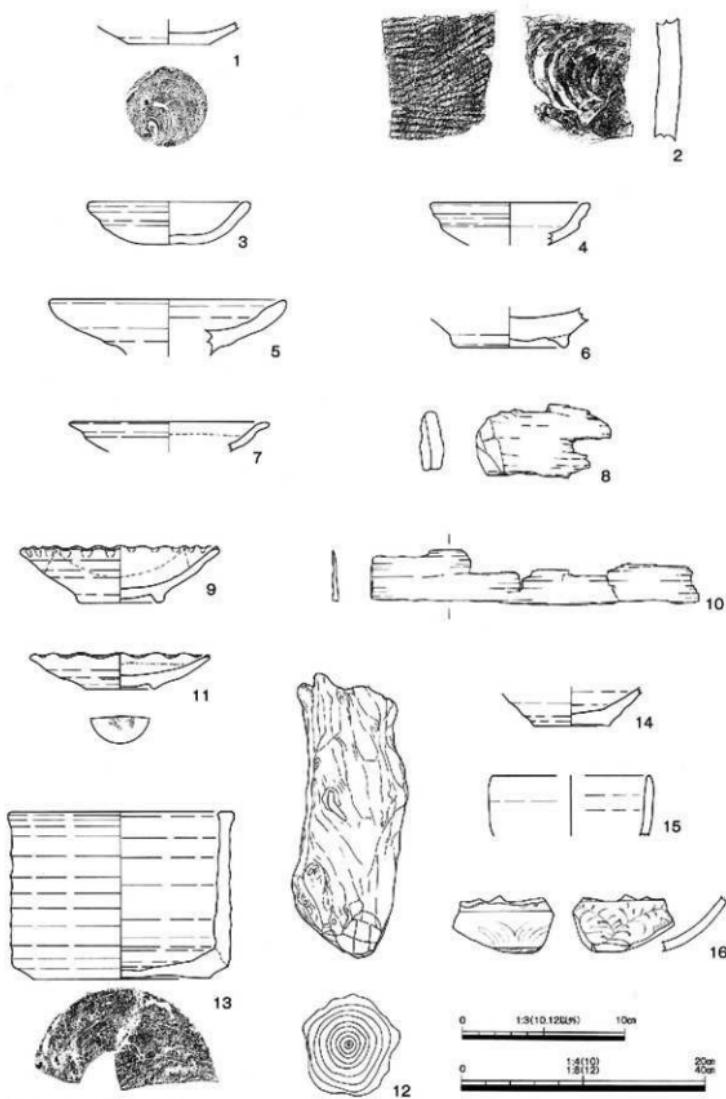
- 内藤紀子：2003「富山県の黒色土器（2）」『富山考古研究』第5号
- 財團法人富山県文化財保存財團監修『文化財調査事務所』1998「五社遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2002「富山市西灘天神遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2006「富山市米田大光遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2006「富山市越前御嶽史跡発掘調査報告書」
- 宮田道一 1957「越中高岡の遺跡と古文」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会
- 白 喜 2003「富山市土器（有刺網）」『富山考古研究』第6号
- 八峰 駿 2001「佐伯高台II」「中世土器研究会論集」



第4図 発掘調査区平面図

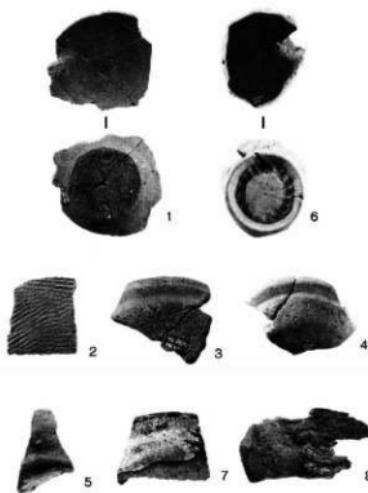


第5図 SE01・SK02・SD03・SD04・P05・P06・P10・P12・SK13  
平面図・土層断面図



第6図 出土遺物実測図

図版



## 報告書抄録

ふりがな	とやましよねだだいかくいせきはつくちょうさほうこくしょ							
書名	富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書							
副書名	株式会社 不二越 物流管理センター建設に先立つ発掘調査							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	41							
編著者名	鹿島昌也 久保浩一郎							
編集機関	富山市教育委員会 富山市埋蔵文化財センター							
所在地	〒930-0091 富山県富山市愛宕町1-2-24 TEL 076-442-4246							
発行年月日	西暦2010(平成22)年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因
米田大覚遺跡	富山市 米田町3丁目	16201	21	36度 44分 10秒	137度 14分 40秒	20100323 ~ 20100402	57	物流管理 センター建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
米田大覚 遺跡	官衙・ 集落跡	古代		須恵器、土師器、黒色土器				
		中世	溝	中世土師器、瀬戸美濃焼				
		近世	井戸、土坑、 溝、ピット	肥前陶磁、越中瀬戸焼				
要約	<p>古代では、試掘調査で特徴的な製作技法から10世紀末～11世紀代とみられる黒色土器が出土した。調査地の西250mでは、8世紀末～10世紀初頭にかけての官衙遺構が見つかっており、それに後続する遺跡が周辺に所在することを示唆する。</p> <p>中世では13世紀代とみられる土師器皿が出土した。遺構は希薄であるが、当該時期の生活の痕跡が認められた。</p> <p>近世では、水田耕作や造成により削平を受けているが、深い井戸や溝などの遺構が一部で検出された。</p>							

## 凡例

- 方位は真北、水平水準は海拔高である。
- 公共座標は世界測地系を使用し、南北をX軸、東西をY軸とした。
- 遺構表記は右記の記号を用いた。 SP:ピット SK:土坑 SE:井戸 SD:溝 SX:不明遺構
- 土壤色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」(2004年度版)に準拠している。

富山市埋蔵文化財調査報告書(41)

**富山市米田大観遺跡発掘調査報告書**

発行日 平成22(2010)年12月28日

発行 富山市教育委員会

編集 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091

富山市愛宕町1-2-24

Tel076-442-4246 Fax076-442-5810

E-mail maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷 中央印刷株式会社